

山田健治教授を送る

本学産業経済研究所は昭和57年4月に開設され、今日にいたる10有余年のあいだに、国際化・高度情報化に向けて急速に変貌していくわが国の経済・産業の現状分析や課題の調査研究、あるいはこの問題に関する会計学的・経営学的側面からの解明等を積極的に推進してきた。山田健治先生はこの産業経済研究所の第3代目の所長として、初代神谷満雄先生(現拓殖大学教授)、第2代井関弘太郎先生が孜孜として築いてこられた資産を着実に継承しながら、その上に研究所のより一層の発展を期すべく、幾多の斬新な企画を立案し、精力的に実現された。

しかしながら残念なことに先生は平成6年3月をもって本学を退職され、同年4月椋山女学園大学に赴任された。ここに、先生が本学に残された多大な業績を振り返るとともに、先生の新しい環境のもとでの一層のご活躍を祈るものである。

山田健治先生が岐阜経済大学を辞して本学に着任されたのは平成3年の4月であった。本学に移られる直前の平成2年12月に名古屋市立大学の経済学博士号を取得された先生の主たる研究領域は、石油問題を核として、環境汚染や環境開発、資源政策、国際経済の諸問題、ひいては資源開発から地域協力におよぶきわめて広範なものであった。平成3年までで既にこれらの専門分野に関して実に6指に余る著書を世に問われ、学問的地位を不動のものとされていた。

本学着任の翌平成4年には産業経済研究所の第3代所長に就任され、ひとり研究所のみならず、経営情報学部的发展と調査研究活動の持続的進展のために種々尽力された。その一端としては、平成4年から5年にかけての4度にわたるシンポジウムの開催があげられる。これらのシンポジウムを通して、中部の産業の21世紀へのソフトランディングの方途、都市整備インフラとテイクオフにかかわる諸問題、いきいきした街づくりの提言、あるいは中部圏域の魅力と展望の解明が産・官・学の共業により企図され、実現への模索が重ねられた。また、産業経済研究所のシンボルマークとしてコスモメビウス(COSMO MEVIUS)の制定を見た。これは「21世紀の世界の動向を生存と協調の融和として捉え、創造と再生を希求する時代のシンボルとして宇宙と地球とをリンケージ」した、深い理念にもとづく格調の高さを誇るものである。さらに、平成6年には、産業経済研究所の研究の方向性や成果を各方面に開示すべく、「ニューズレター」の創刊を得るに至った。同年にはまた、『中部大学産業経済研究所 マネジメント・ビュー』のシリーズが開始され、3月にはその第1号として『遠近のマネジメント』が刊行された。

経営情報学部全体にかかわるものとしては、山田先生が中心となって編纂された

『経営情報学への招待』、『経営情報学への展開』の出版がある。経営情報学部創設後10年間の教育と研究の成果を示すこれらの著書が、経営情報学という若い学問領域の深化と拡充の契機の一つとなることが強く期待されている。このほか、山田先生が大学院経営情報学研究設立のために煩瑣を厭わず、多面にわたり献身的に力を注がれたことは、周知の事柄に属している。

山田先生は、教育面にも渾身の努力を傾けられ、多くの学生に慕われた。授業の資料や練習問題の取舍選択にも緻密な配慮を惜しまれることはなく、質問や相談に先生の部屋を訪れる学生が、演習(ゼミ)を担当しておられないことから考えられないほどの人数に及ぶことをスタッフ一同常々実感させられていた。

このように、先生は研究・学内行政・教育という大学教員の三位一体をきわめて高い水準で体現されていたのである。勤勉精神の権化ともいべき先生は、スランプに見舞われた時には、とにかく原稿を書くということで脱出するという独特の生活スタイルを堅持されていた。『涙なしの出版術』という異色の著書はそのような生活スタイルの一つの産物である。瘦軀のいずこに先生のそうしたエネルギーの源泉が存在するのかは不明であるが、本学における強固な基本 OS と優れた OA サポートとは、あいまって先生の功績の一分に寄与したことは想像に難くない。

大学はまもなく冬の時代を迎えるといわれる。訪れる闇の時代の彼方には、新たな暁が待つものと信ずるものではあるが、山田先生は座して闇の時代をやり過ごすという生き方を毅然として排された。先生の蓄積された多様な営為と実績が、闇の時代を照らすいく筋もの光明として正鵠を射たものであるとすれば、たんにこれまでの事業を維持・推進していくというよりは、光源の強度を高め、射程を拡張していくことが、後に残った私達所員の責務の一つであると感じるものである。

先生の多面にわたるご活躍を重ねてお祈り申し上げるとともに、一層の御健康と御多幸とを心より念じたい。

経営情報学部教授

石 田 昌 夫

山田健治教授略歴・主な業績

【略歴】

昭和41年 3 月 神戸商科大学商経学部経済学科卒業

4 月 キムラタン株式会社入社(昭和43年 3 月まで)

昭和44年 4 月 名古屋市立西陵商業高等学校教諭

(昭和48年 3 月まで)

昭和47年 3 月 名古屋市立大学大学院修士課程修了
 昭和48年 3 月 同 博士課程退学
 4 月 岐阜経済大学経済学部専任講師
 昭和51年 4 月 同 助教授
 昭和58年 4 月 同 教授
 平成 2 年12月 経済学博士(名古屋市立大学)
 平成 3 年 3 月 岐阜経済大学退職
 4 月 中部大学経営情報学部教授
 平成 4 年 4 月 同 産業経済研究所長(平成 6 年 3 月まで)
 平成 6 年 3 月 中部大学退職
 4 月 椋山女学園大学生生活科学部教授

【研究活動】

著書（代表的なもののみ）

『北海油田の開発政策』成文堂，昭和58年
 『石油開発の構造』成文堂，昭和60年
 『広域汚染と環境政策』（共著）成文堂，平成元年
 『新しい国際資源政策』成文堂，平成元年
 『やさしい国際経済論』（共著）成文堂，平成 3 年
 『資源開発と地域協力』成文堂，平成 3 年
 『経営情報学への招待』（共著），平成 6 年

論文（多数のため省略）